思いや意図をもって音楽をつくる指導の工夫
～音の組合せの試行錯誤を支援する教材の活用や交流活動を通して～

東吾妻町立岩島小学校
教諭　湯浅　直起

１　実践の目的

児童が、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みに着目し、実際に音を出しながら音の組合せを試行錯誤して決定していく活動を行うことで、思いや意図をもって音楽をつくることができるようにする。

２　実践の方法

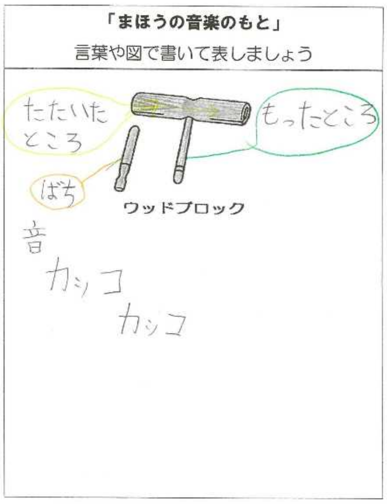
本実践では、２学期に、４年生を対象として、リズムを打ち合う常時活動と、打楽器を用いた音楽づくりの授業を行った。常時活動や授業では、交流的な音楽活動を行ったり自作の教材を用いたりすることで、目的の達成を図った。

（１）常時活動

常時活動は、打楽器が材質や叩くばちの種類、演奏の仕方によって響きが異なることを理解させたり、４拍子の基本的なリズムに慣れさせたりすることを目指した。

まず、打楽器の響きについて理解を助ける教材として、「まほうの音楽のもと」カードを用いた（図１）。これは、４年生の実践以前に、３年生が記録したものである。３年生は、このカードに叩く場所やばちの種類によって、どのような響きがするのか、具体的に擬音語で記入したり、図を書き入れたりして、視覚的に分かりやすく記録した。４年生は、このカードを事前に確認することで、どの打楽器がどのような響きがするのか、見通しをもつことができると考えた。加えて、これらのカードを、音楽室の壁面や机等の様々な場所に掲示しておくことで、児童が学習する際のヒントカードとしても活用できるようにした。

図１：「まほうの音楽のもと」カードの例



また、楽器を材質別に分類した打楽器の一覧表も活用した（図２）。これは、５、６年生の児童が、１学期に行った学習の中で記録したもので、打楽器の音を出して気付いたことを、金属質、木質、膜質の材質別にまとめたものである。前述の「まほうの音楽のもと」カードと同様に、児童が打楽器についての興味や関心を高められることを意図した。

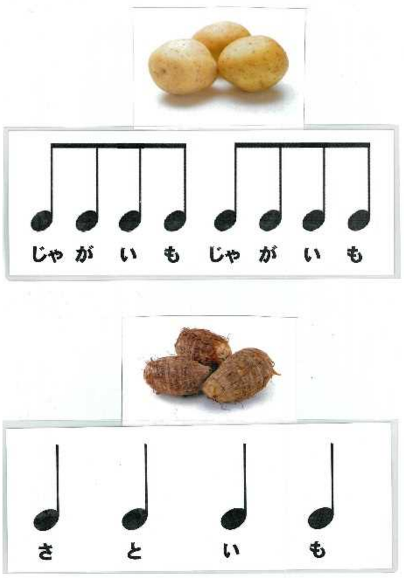
図２：材質別の打楽器の一覧表の例

次に、基本的なリズムに慣れさせるための交流活動として、毎時の導入に、互いに打楽器を用いてリズムを打ち合う活動を行った。ここでは、リズムマ

シーンが鳴らす４拍子のビートを感じながら、ペアや一対集団で、相手のリズムを繰り返したり、変化させたりして楽器を演奏した。この活動を通して、児童が基本的なリズムの習得できると共に、打楽器の多様な奏法や響きの違いを体験したり、音楽づくりを行う上で必要となる反復や変化といった音楽の仕組みに慣れたりすることができると考えた。

また、リズムの習得のために、リズムカードを用いた（図３）。これは、日常的に使う言葉を４拍子の基本的なリズムに当てはめて、音符での表記と合わせて掲示することで、リズムの理解を視覚的、言語的に支援することを意図した。前述の交流活動の際に、「じゃがいものリズムで叩こう。」「自分はさといものリズムで叩くから、違うリズムで返してください。」等と児童同士で伝え合うことで、リズムを叩く際の手がかりとなるようにした。

図３：リズムカードの例



（２）音楽づくりの授業

打楽器を用いた音楽づくりの授業は、教育芸術社の「小学生の音楽４」所収の題材「いろいろな音のひびきを感じ取ろう」にある教材「打楽器の音楽」に焦点を当てて行った。本授業では、児童が響きの特徴を生かしながら、音の組合せ方を試行錯誤して工夫し、思いや意図をもって自分たちのテーマに合った音楽をつくることをねらいとした。

音楽づくりでは、必要感をもって学習に取り組むために、自分たちのテーマを設定させること、そのテーマに合った音楽をつくろうと、思いや意図をもつこと、更に、思いや意図が形になるように、音楽をつくる過程が視覚的に理解できることが重要である。そのために、本授業では、ホワイトボードとワークシートを活用した。ホワイトボードはＡ２サイズのものを用意し、それに合った大きさのワークシートを準備した。ホワイトボードには、自分たちのテーマや、試行錯誤の過程で生まれた気付き、アイデアをメモできるようにした。更に、常時活動で用いたリズムカードを縮小したものにマグネットを取り付けることで、ホワイトボード上で操作して並べ、音の組合せが一目で分かるようにした（図４）。これらの手立てを通して、ねらいを達成することができると考えた。

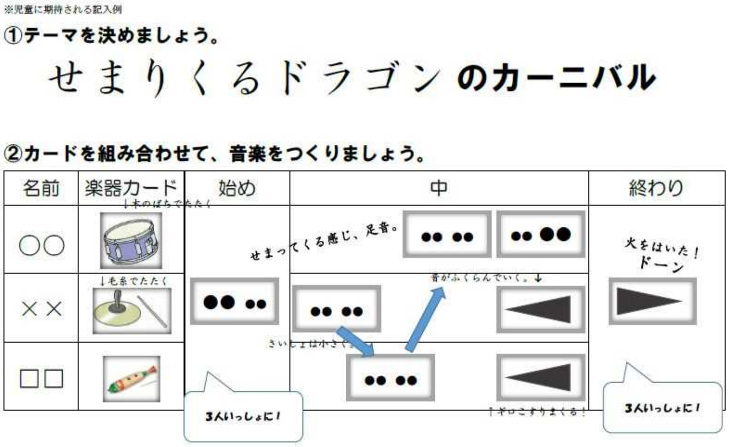


図４：期待された児童のワークシートへの記入例

３　実践の経過と結果

まず、２学期のはじめから、音楽の授業の導入において、常時活動を継続して行った。児童は最初に、他学年が記録した「まほうの音楽のもと」カードや材質別の一覧表を確認した。児童からは、「金属でできた楽器がたくさん合って、きれいな音がしそうだな。」「太鼓は、そういえば鼓笛隊で友だちが叩いていたな、自分も叩いてみたいな。」等と反応があり、打楽器に対する関心を高めていたといえる。リズムを打ち合う交流的な音楽活動では、まずリズムカードの通りにリズム唱をしたり、ボディパーカッションで演奏したりすることから行い、徐々に打楽器を用いるようにした。打楽器を実際に用いる場面では、他学年の記録で興味をもった楽器を好きに選ばせたり、くじを引かせてランダムに選ばせたりするようにした。このことで、児童が関心を高めて活動に取り組めると共に、多様な楽器の演奏を体験することができると考えた。更に、「繰り返し」「変化」「音の重なり」といった音楽の仕組みについても、リズムカードと合わせて図形化したカードを掲示することで、視覚的な理解を支援することを意図して実践した（図５）。これらの常時活動に対する振り返りとして、児童からは「いろいろな楽器ができて楽しかった。」「次は小太鼓の枠を叩いてみたい」等といった、関心がより高まっていることや、打楽器の多様な奏法について学んでいることが窺える反応があった（図６）。

そして、１１月１７日（金）に、音楽づくりの授業を実践した。本授業では、「ひびきのとくちょうを生かしながら、音の組み合わせ方を工夫し、テーマに合った音楽をつくろう」とめあてを設定した。児童はまず、前授業までに設定した小グループに分かれ、テーマと楽器の選択に基づき、リズムカードを組み合わせた。そして、組み合わせた結果を実際に音に出して試し、仲間同士で話し合いながら、テーマに合った音楽になるように仕上げていった（図７）。グループ活動の後に中間発表を行い、思いや意図をどのように工夫して表そうとしたのかという表現のよさについて、説明させたり感想を発表させたりすることで、実感をもって共有できるように図

図５：音楽の仕組みカードの例

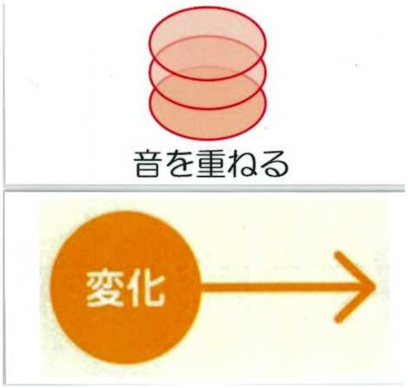


図６：常時活動に対する児童の振り返りの例

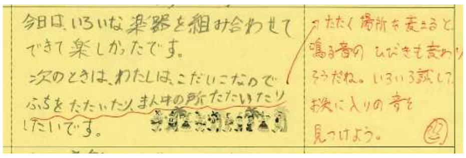


図７：児童の試行錯誤の様子

った（図８）。授業の終わりの振り返りでは、「ほかの班の発表を聴いたら、鬼の様子や子猫の様子がよく伝わってきた」「自分の班では考え付かない組合せをしている班があってすごいと思った」等と、他の班の思いや意図を実感していたり、組合せの工夫のよさに気付いたりしていることが窺える記述が見られた（図９）。

本授業の次時には、中間発表での取り組みをもとに練り直した音楽を改めて発表し、作品の完成とした。完成した作品には、一人ずつ順番に演奏してから音を重ねることで、３匹の子猫が集まる様子を表している班や、鬼の勇ましい様子を表すために強弱の工夫についてメモをして、その通りに演奏しようとした班があり、各班が思いや意図をもって音楽をつくっていた様子が窺えた（図１０）。

図８：児童の試行錯誤の様子

図９：本授業に対する児童の振り返りの例

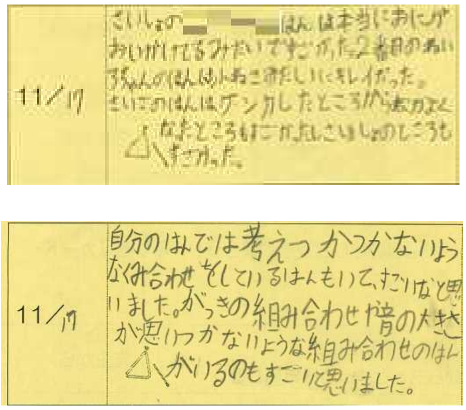
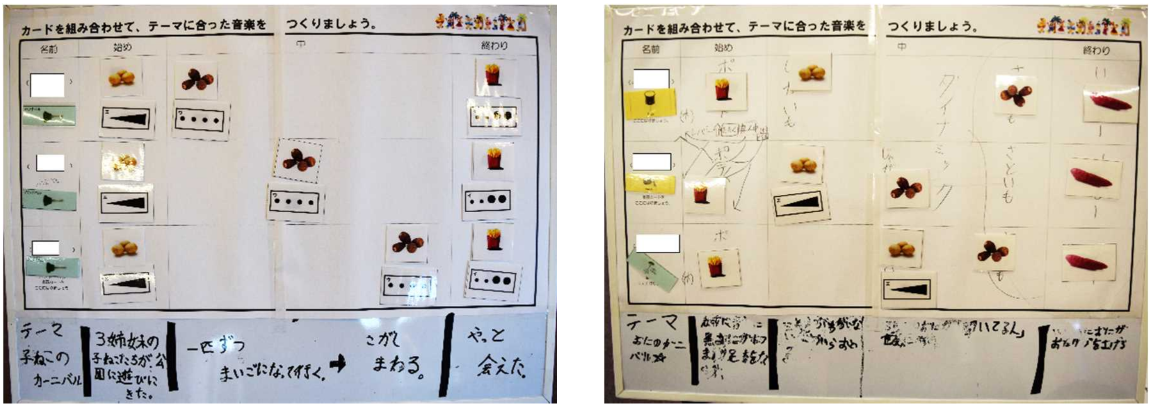


図１０：完成した作品の例



４　成果と課題

本実践では、常時活動から継続的に教材を活用したり交流的な音楽活動を行ったりして、本授業へと繋いでいくことで、児童がリズムに慣れたりや音楽の仕組みへの理解を深めたりし、音楽づくりに生かすことができたといえる。更に、本授業に於いては、ホワイトボードやリズムカードの操作といった教材の活動を通して、視覚的な支援のもと、スムーズに思いや意図をもって音楽づくりができたと考えられる。

一方で、本授業のカード操作の場面で、カードを並べることだけに拘って、楽器を鳴らすような音楽活動の時間が限られてしまったことが大きな課題である。今後、音楽活動と思考とが両立できるような教材づくり及び活用の工夫を模索していきたい。

５　参考文献

・今村央子（２０１４）　「『音楽づくり』成功の授業プラン」　明治図書